



目次

1. 平成25年度FD推進部活動方針
2. 平成25年度初任教員研修会を開催
3. TA研修会（実験・演習系）を開催
4. クリッカー紹介
5. 他大学訪問調査（弘前大学）
6. 第19回大学教育研究フォーラム 参加報告
7. FD合宿研修会のお知らせ

平成25年度FD推進部活動方針

FD推進部門長 上野誠也

主体的な学びを自主的な改善で

平成24年8月に文部科学省中央教育審議会が発行した答申は学生の「主体的学び」を促す教育を目指すように大学教育の質的転換を要求している。当FD推進部では、一昨年度から「アクティブ・ラーニング」を重点テーマに取り上げ、大学教育を学生の受け身の学習から脱却し、学生が行動的に学修する教育手法の情報提供を続けてきた。今年も重点テーマに掲げ、教員の自主的な改善が学生の主体的な学びに繋がることを期待している。

一方、昨年度から教務厚生部会で審議されて

いる成績評価のガイドラインに関する情報提供も今年度は重点的に行う計画である。昨年度の教務厚生部会内のワーキンググループの議論によると、成績評価は授業設計の時点から考慮すべきことであるという結論に至った。他大学の実施例を紹介するなどの議論に向けた情報提供を行う計画である。

重点テーマの設定

今年度のFD推進部の活動方針を決めるにあたって、重点テーマを設定した。その重点テーマに従って、シンポジウムの企画を立てる計画である。今年度は以下の2テーマを設定した。

| | |
|---------------|--------------------------------|
| 重点テーマⅠ | 教員が教える教育から 学生が学ぶ教育へ |
|---------------|--------------------------------|

平成23年度のFDシンポジウムで取り上げたテーマ「アクティブ・ラーニング」を学内に展開させ、学生が主体的に学ぶ環境を授業で取り入れることを勧める。具体的には以下の候補がある。

- ・FD合宿研修会にて学内の事例を紹介してもらい、各部局の情報共有を行うとともに、参加者のFDリーダー等に要点を修得してもらう。
- ・FDミニシンポジウム等を開催して、各部局へアクティブ・ラーニングの手法を広く情報提供する。

| | |
|---------------|-----------------------------------|
| 重点テーマⅡ | 教育の質保証に向けて ー授業設計と成績評価ー |
|---------------|-----------------------------------|

大学教育の質保証が問われている。学生の成績が正しくつけられているか、教員間での格差が無いかなどが課題として議論されている。本学では平成 24 年度に教務厚生部会の下に、成績評価ガイドライン検討WGが発足し、議論が

展開された。成績評価ガイドラインを設定するためには、シラバス作成時の授業設計を含めたガイドラインの設定が重要であるとの結論が示された。本年度は、シンポジウムや研修会を通して、ガイドラインの背景にある授業設計と成績評価の考え方を教育改善の観点から全学に提供する活動を行う。

平成 25 年度活動計画

平成 25 年度一年間の活動計画を下表に示す。表には教育改善学生グループの活動内容も併記した。多くの活動計画が前年度と同じ時期に実施するが、重点テーマの実施を考慮した内容とする点異なる。平成 25 年度は各部局の教授会前に行う 30 分間の FD ミニシンポジウムを春学期に開催する。学生が主体的に学ぶために教員が行える手法の情報提供を行う予定である。多くの教員の方々が、主体的にこの企画に参加していただき、何かを得ることができれば幸いである。

平成 25 年度 FD カレンダー

| | FD 推進部 | 教育改善学生グループ |
|------|---------------------------|-------------------------------|
| 4 月 | 初任教員研修会、TA 研修会（実験担当）、公開授業 | 新入生勧誘企画 |
| 5 月 | TA 研修会（授業担当） | 清陵祭企画、関東圏学生 FD 連絡会議 |
| 6 月 | FDNL24 号 | 教育改善企画（格言の掲示） |
| 7 月 | 公開授業、FD ミニシンポジウム、授業アンケート | 「学生目線のシラバス（学バス）」作成のためのアンケート実施 |
| 8 月 | FD 合宿研修会 | オープンキャンパス企画、学生 FD サミット参加 |
| 9 月 | FDNL25 号 | 関東圏学生 FD フォーラム参加 |
| 10 月 | FDNL 特別号（平成 24 年度授業アンケート） | |
| 11 月 | 公開授業、FD シンポジウム | 常盤祭企画 |
| 12 月 | FDNL26 号 | |
| 1 月 | 授業アンケート | |
| 2 月 | | 学バス作成（改訂版） |
| 3 月 | FDNL27 号、同特別号（活動報告書） | 学生 FD サミット開催 |

平成 25 年度初任教員研修会を開催

FD推進部 上野誠也

二部構成の初任教員研修会

平成 25 年 4 月 1 日(月)に、経営学部大会議室において、平成 25 年度の初任教員研修会を実施した。前年度の初任教員研修会以降に採用された大学教員 30 名と附属学校の新任教員 29 名の参加があった。

研修会は、例年通りの二部構成で実施した。第 1 部では学長を始め副学長や事務局長が、横浜国立大学を異なる視点から紹介した。初任教員へ大学への帰属意識を高めることを目的としている。参加者全員が第 1 部に参加し、大学執行部の講演を聴いた。

第 2 部は 2 グループに分かれて研修会を実施した。附属学校の初任教員は教育人間科学部へ移動し、教育人間科学部の FD 委員長らが担当した。大学教員の初任教員は第 1 部と同じ会場に残り FD 推進部が担当した研修会に参加した。こちらでは、FD 推進部が FD 推進活動を紹介した後に、クリッカーを使って「アクティブ・ラーニング」と「学生主体の授業設計」を紹介した。クリッカーを使ったことへの反響は大きく、

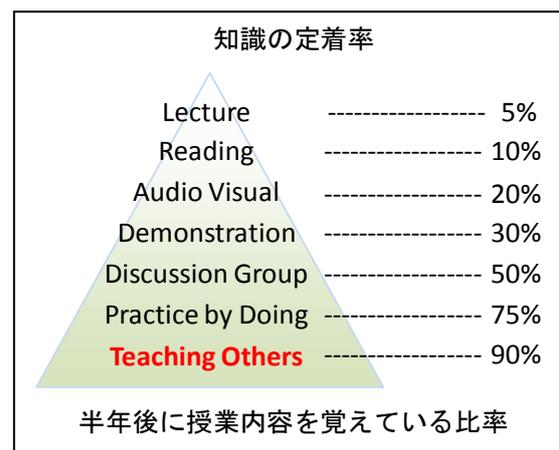


初任研修会の風景

すぐにでも授業に取り入れたいという感想が多かった。学生とのコミュニケーションが重要であることを知るよい機会となった。

アクティブ・ラーニング

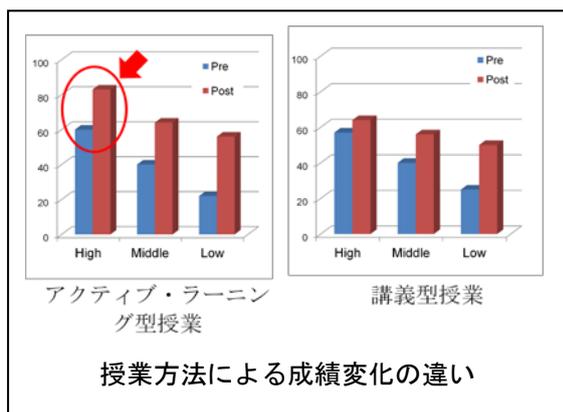
授業方法によって学生が覚えている内容が変化するならば、効率のよい授業方法を採用することが教育改善に繋がる。この点に注目し、「知識の定着率」を測定した結果がある。米国の National Training Laboratories が調査したもので、learning pyramid とも呼ばれている。



今回はこのデータを元に、クイズ形式の問題を作り、クリッカーで解答してもらう時間を取った。クリッカーを用いるので選択問題とならざるを得ないが、解答の選択肢を参加者から募ることを行った。つまり、受講者が問題を作る形式である。このように講演に参加することが理解に繋がることを体験していただいた。

「知識の定着率」が示すように、他人へ教えることが非常に効果的であることが示されている。その事例として、MIT(マサチューセッツ工科大学)で、授業方法による成績の変化を測定したデータを紹介した。次図に示すアクティブ・

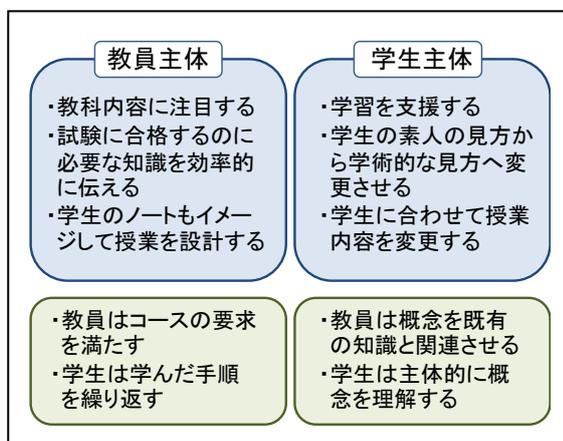
ラーニング型授業とは、教員が 30 分程度授業を行った後は、実験とグループディスカッション・プレゼンテーションで構成された授業である。授業前の成績で分けた 3 グループ別の成績変化を示している。注目すべき点は、アクティブ・ラーニング型授業をすると、成績上位者が著しく成長する点である。(図中の矢印) 研究大



学を目指すならば、優秀な学生を伸ばす教育が必要と考えている。よって、アクティブ・ラーニングを積極的に取り入れることを研修会の中で勧めた。

学生主体の授業設計

「学生が主体的に学ぶ」ことが高く問われ、学び続ける姿勢が要求されている。しかし、授業内で教える内容を守らなければ、カリキュラムが成立しない。教員主体の授業設計も重要である。参加者の多くは、これから授業設計を行う方が多い。その状況を把握して、両者の特徴や利点を解説した。両者のバランスを考慮した



授業設計が必要である。

参加者に対して、自分の授業はどこを目標にしているかを聞いてみた。回答はクリッカーを用い、その場で集計した下表の結果を見せた。

| 問：あなたの授業目標はどれですか | |
|------------------|-----|
| 1. 教員主体の授業 | 22% |
| 2. どちらとも言えない | 37% |
| 3. 学生主体の授業 | 41% |

学生主体の授業の比率が高いが、両者を考えている比率も高い。今後の授業設計に期待できる結果を示した。

学生の心に火をつける

昨年の中教審の答申で「学生が主体的に学ぶ」ことが注目されているが、実は古くから同じことが言われている。研修会の最後に、19 世紀の

凡庸な教師はただしゃべる
よい教師は説明する
優れた教師はやってみせる
偉大な教師は心に火をつける

ウィリアム・アーサー・ワード

教育学者の言葉を引用して、学生主体の教育とは何かを考えてもらいたいとお願いした。

研修会後のアンケートを見ると、クリッカーを使ったことのインパクトが強く表れていた。FD 推進部は、この研修会の経験を活かして、FD ミニシンポジウムによる全学的な情報提供を行うことにした。

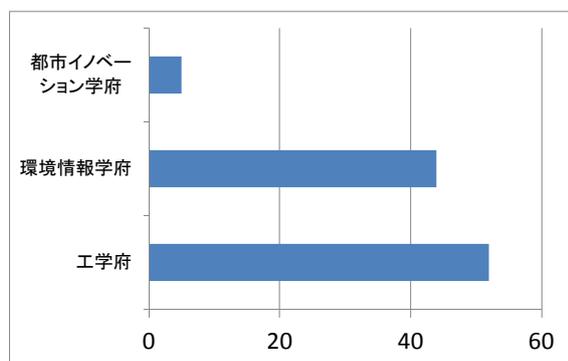


TA 研修会（実験・演習系）を開催

FD推進部 上野誠也

過去最大の参加者数

理系のティーチング・アシスタント(TA)を対象としたTA研修会(実験・演習系)を、平成25年4月11日(水)16:30より、理工学部事務棟第1会議室で開催した。理系のTAは新学期開始とともに実作業がスタートするので、この週に開催しなければ意味がなく、入学式から1週間以内で開催となった。短い周知期間にもかかわらず、参加者は101名に達し、過去最大の参加者数となった。



学府別の出席者数

意識転換を目的

TA研修会に参加するTAは、今後の業務内容も資料のコピーから実験のアドバイスまで様々であり、また、一つの業務内容にしても学科が異なれば注意すべき点異なる。TAからのアンケートを見ても、具体的な業務の説明を希望する参加者もいるが、それを個々に対応する研修会を開くことは不可能である。そのために、毎年開催するTA研修会は、参加者の意識転換を目的としている。すなわち、今まで授業を受ける側の学生であった院生達に、授業を教える側の立場に立つことの意識転換である。自分を伸ばす視点から相手を伸ばす視点に変えることが必要である。短い研

修会の時間でそのきっかけを掴んでもらえれば、目的が達成されていると考えている。

研修会では、グループ・ディスカッションを行うことを重視している。実際に教室で受講学生と接する場面においては、相手の意見を聞き、自

【質問例】 TAの田中君は学生が質問しやすい雰囲気作りにと頻りに学生たちに声をかけて良好な関係作りに励んだが、一部の学生とは「ため口」を利くほどの友達関係になった。このままでよいのだろうか。

分の意見を述べる必要がある。自分だけで勉強していた学生の立場から、相手の考えを理解するTAの立場への変化を感じてもらいためである。そのため質問は全員の意見が集約しやすい内容としている。

アンケートから

参加者からの質問の中には個別に対応すべき内容が多く含まれている。

- ・質問に対してどの程度まで回答してよいか分からない。
- ・不真面目な学生やグループに溶け込めない学生への対応はどうすべきか。
- ・一人の作業が遅れたためにグループの作業が遅れた時の対応はどうすべきか。

割合は少ないものの、業務に対して不安を感じているTAがいることがアンケートから分かる。この不安は教員と連絡を密に取ることで解消することが必要と考えている。各教員の協力とともにより良い教育を目指していきたい。

クリッカー紹介

FD推進部 安野舞子

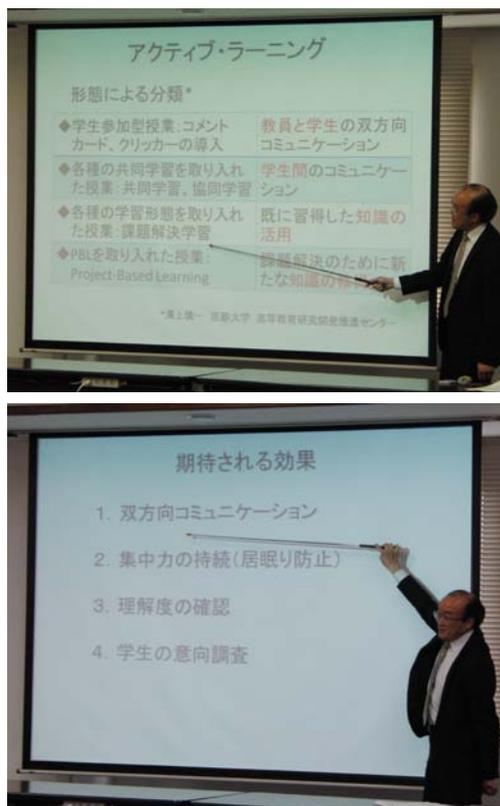
アクティブ・ラーニングを促進するツールの一つとして、「クリッカー」を授業で利用する教員が日本の大学では増えてきているが、本学でもこの春、KEEPAD JAPAN 社のオーディエンス・レスポンス・システム (TurningPoint®) を購入し、希望する教員が授業でクリッカーを使用できるようになった。クリッカーとはテレビリモコンのようなカード端末 (レスポンスカード) で、専用のソフトウェアを使ったプレゼン用スライドで講義者が簡単なテストやアンケートを行うと、受講者が押したクリッカーボタンの回答結果が集計されて、リアルタイムにパソ

コンの画面/スクリーンに表示される、というものである。筆者も春学期に担当している授業 (受講者数 85 名) で利用してみたが、学生からの反響は上々で、皆食い入るようにスクリーンに映し出された結果を見ていた。

クリッカーは、教員・学生の双方向コミュニケーションを可能にすると共に、受講者が今、何をどれだけ理解しているかをリアルタイムで把握できるツールである。FD 推進部では今後、クリッカー研修会等を行い、学内での活用を呼びかけて参りたい。



KEEPAD JAPAN 社のレスポンス・カード



クリッカー研修会の様子

他大学訪問調査（弘前大学）

FD推進部 上野誠也

FD活動の盛んな弘前大学

青森県西部のりんごの産地としても有名な弘前市に位置する弘前大学はFDシンポジウムを積極的に開催するなどFD活動の盛んな大学である。平成24年11月には弘前大学の田中正弘先生を本学にお呼びして「成績評価の考え方および弘前大学と英国大学の事例」と題する講演をいただいている。FD推進部は平成25年3月27日に弘前大学21世紀教育センターを訪ね、FD活動に関する訪問調査を実施した。訪問目的は、同センターが導入した成績評価ガイドラインの経緯を知ることであり、導入時に発生した問題点などを担当者と直接面会することで調査を実施した。



訪問した弘前大学

ガイドライン導入の経緯

弘前大学では教養部廃止に伴い、教養教育科目を全学部の教員が担当することになった。教員1人が1コマを担当し、専門の概論ではなく教養科目を開講することになった。その名を「21世紀教育科目」とした。全教員が担当するので、成績評価がばらばらにならないかなどの懸念があった。その改革時に、評価の標準化が唱えられ、ガ

イドライン「成績評価の方法と基準」の制定に踏み切ったのである。計画段階での外部の評価が高く、これが追い風となって、平成17年度の導入に向けて、平成14年度から試行的に実施された。導入の目的は以下である。

- ①適正な成績評価システムの構築
- ②「教育の質保証」の説明のための取組み
- ③教育改善を教員に求める取組み

成績評価を行う時に、その学期の授業内容を教員が自己評価し、教育改善へ繋げる目的が含まれている。

3年間の試行期間

導入からの3年間は、毎年、見直しを行う試行期間とした。教員からのアンケートを実施し、それらに答えるようにガイドラインを見直すことを行った。例えば、「標準的な平均点」は下図のように3年間に変化している。



「標準的な平均点」の変遷

教員から寄せられた意見の中には、下記に示すものが含まれており、それらに回答をすることで改革が進められた。本学でも参考となるので、教員の意見とセンターの回答を併せて示す。

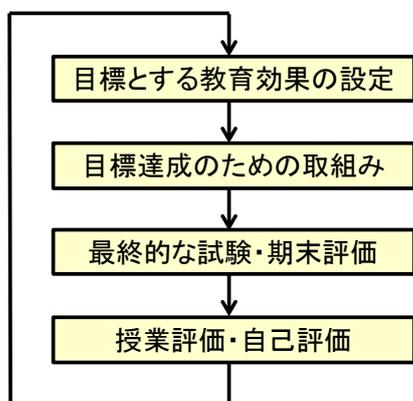
【意見】 相対評価を要請か。

【回答】 設定する基準は相対評価の要請ではなく、

①成績評価基準の共通化、②科目内における成績評価基準の共通化、③成績評価の公平性を掲げるものとしている。絶対評価にしても明確な評価基準を示すことが求められており、それを実施するものである。

【意見】 教育の水準を下げることの要請か。

【回答】 下図に示す改善サイクルを実施することを目的としており、教育改善を目的としている。平成17年度の基準には「授業設計」を含めたガイドラインとしている。



改善サイクル

【意見】 科目区分ごとに異なる基準を採用できないか。

【回答】 柔軟な対応を行うことは必要であり、科目区分ごとの設定を最終的には採用する。具体的には、一定技能を習得する科目は平均点を80点に設定することとした。

標準的な平均点を設定しているが、教員は自分が入力した成績の平均点を知るシステムはない。必要なら自分で計算しなければならない。しかし、その方が成績評価時の補正を行うことが無くて、本来の目的を達成することができる。ちなみに、弘前大学では「秀」「優」「良」「可」の分布の基

準は設けていない。

訪問を終えて

弘前大学の成績評価基準の導入は、教養教育科目を改革して「21世紀教育科目」の導入という大改革の流れに乗った導入であり、外部の評価機関の評価が後押しになっていた。非常にタイミングのよい時期に導入を決めた経緯がある。「標準化」という基本的な概念は教員のベースにあったので、設計は比較的容易に進み、広く理解者を生む展開となっていた。3年間の試行を行うことで教員からの意見を広く集めることができ、成績評価の理念が徐々に明確になっていった。最終的に示されたガイドライン「成績評価の方法と基準」もその設定に至るまでの議論も参考になった。

本学でも、現在、成績評価の議論が進められているが、科目の範囲や基準の設定など弘前大学と異なる点がある。もちろん、どちらがよいとは簡単に結論付けられないが、成績評価基準の導入には十分な議論を展開し、教員の共通理念を持つことが必要である。

The English Lounge

弘前大学の英語コミュニケーション力向上を目指した The English Lounge を見学した。4名のネイティブ教員と学生が自由に英会話を楽しむ部屋であり、TOEIC, TOEFL セミナーも開講している。身近に異文化と触れあうことができ、グローバルな環境を整えていた。



第19回大学教育研究フォーラム 参加報告

FD推進部 上野誠也

日本最大級の研究集会

京都大学高等教育研究推進センターが主催する第19回大学教育研究フォーラムが平成25年3月14日-15日の2日間にわたって、京都大学吉田キャンパスで開催された。本フォーラムは大学のセンターが主催する研究集会であるが、高等教育を専門とする研究者とFD活動を推進する大学教職員にとって、日本を代表する集会となっている。今回も全国から参加者が集まり、600名を超える参加者数になったとの報告があった。

フォーラムは、全体が集まるシンポジウム、4講演を平行して行う小講演、企画者が提案するテーマで参加者が討論するラウンドテーブル、そして誰でもが発表できる一般講演で構成されている。いずれもディスカッションを重視した時間配分になっており、知りたいことを自由に聞き、考えたことを自由に発言できる配慮がなされている。シンポジウムをはじめとし、講演内容を見れば、現在の大学教育における最新動向を知ることができ、また、新たな情報を得る高いレベルの集会である。

興味の中心は「学生の主体的学び」

今回のフォーラムの最も注目を浴びたテーマは「学生の主体的な学び」である。平成24年8月に文部科学省の中央教育審議会が答申を発表したことも受けて、学生の主体的な学びを生むための教育に多くの講演が集中した。教育手法や支援ツール、実践例紹介などと併せて、問題提起も活発に行われていた。講演内容を大きく3つに分類すると、①教育理論、②教育手法、③教育ツールに分けられる。



シンポジウムが行われた百周年時計台記念館

①教育理論

教育学のほかに心理学や社会学も含めた立場から、現代が要求している教育を見直す報告が興味深かった。主体的であるから、学生が自発的に行動すれば、それで十分と思われがちである。しかし、自発的な行為によって他者との関係を編み直すことができなければいけないとの指摘もあった。この他者は、教員や同僚の学生といった場合は容易に思いつくが、学びの対象となる文献も含まれるということである。確かに、教育が学生に望んでいることは、ものの見方や考え方の変化である。

②教育手法

主体的な学びの教育手法の総称として、アクティブ・ラーニング（以下ALと略す）が挙げられる。ALにはその深さによって段階的に多くの手法があり、多くの大学で実施されている。そのため実施例が報告され、それによる効果も実測されている。グループディスカッションを取り入れた授業で、一人では理解することが限界であったレベルも複数人なら理解することができるようになる。高いレベルの教材を使用することができるという報告は興味深かった。

③教育ツール

クリッカーや携帯電話を用いて、学生が参加する授業を実施している例が紹介されて、利点とともに課題を示していた。大学によって、環境が異なるが、参考になる報告であった。将来を考えて、i-Pad を学生全員が持ち、インタラクティブな授業のデモがあったので、参加し体験した。圧巻だったのは、使用した教室が前面の壁面全てが液晶パネルで埋め尽くされていた。教員の質問に対する学生全員の手書きの答が前面パネルに映し出し、それを元に議論できる。未来の教室風景を体験することができた。

シンポジウムも「主体的な学び」

ここでは、5講演とパネルディスカッションで構成されたシンポジウム内容を紹介する。約500席の会場がほぼ満席となる盛況であった。

1) 渡部信一(東北大学)：認知科学から見た「主体的な学び」

伝統芸能の世界における師匠が弟子に教えるという日本的な教育と現代の教育を対比させて「主体的な学び」の問題提起を行った講演であった。伝統芸能の教授は、教育方法が明確に示されているわけでは無く、ましてや指導要領などありはしない。その伝統的な教育現場で弟子が成長する事実から3点の問題提起を行った。

- ①教員主導で学生の主体的学びができるか
- ②効率的に主体的学びを得ることはできるか
- ③主体的学びを正しく評価できるか

今後、主体的学びを導入するとき、重要なポイントを指摘していると思われる。

2) 美馬のゆり(はこだて未来大学)：学習の共同性と社会性を活かした学生と教員の学びの場のデザイン

はこだて未来大学で実施されているプロジェクト学習を紹介した講演であった。3年生が全員必修で受けるプロジェクト学習は、学生10名のグループに教員2名または3名がついて

PBL(Project Based Learning)を実践している。継続できるための組織の機能やグループ規模、大学施設などを実体験から紹介した。強調された点は、題目にもあるように、複数の学生で理解の深化を生み出す「共同性」とプロジェクトが社会的意義を持つ「社会性」である。両者を兼ね備えたプロジェクトの選定が重要である。

3) 田中智志(東京大学)：主体的な学びとは何か

社会構造の観点から「主体的な学び」を再考した講演であった。現代社会は機能分化社会といわれ、それぞれに価値観が異なる方向へ展開している。そのなかで人は自分を有用化することを心がけ、そのために教育は諸問題を解決し続ける能力を形成することが望まれている。強調された点は、自発的に動いたからといって主体的にはならないということである。他者との関係を編み直すことができから初めて主体的な学びといえる。形式的な授業改革への警告とも受け止められる。

4) 藤田英典(東京大学名誉教授)：学びの主体性と共同性

「主体的」ということばを他の類似なことばに置き換えることで見えてくる現代教育の不足点を指摘した講演であった。まず、主体的に類似の単語を拾上げると、①主観性、②自発性、③自律性、④独立性、⑤独創性、⑥自己同一性などがあがった。このうち②はすぐに思いつくことであり、これだけに注目した誤解があることを指摘している。注目すべき点は①の主観性であり、これには個人は固有であるという「固有性」と他者や社会との関係で更新さえるという「共同性」の二面を有しているという点である。特に後者の重要性を指摘していた。

5) 松坂浩史(文部科学省)：なぜいま学生の学修を中央教育審議会で取り上げるのか

今回の「主体的な学び」の背景を説明する講演であった。本学で平成24年11月に開催されたFDシンポジウムにおける合田氏の講演と重なる

点が多いので、詳細はFDニュースレター22号をご覧ください。社会の要請に大学教育は答えていないという一言に尽きるであろう。

「分かったつもり」の「主体的な学び」

我々の日常会話には、コミュニティ内部には通じるがコミュニティ外部には説明できないことばがある。これを「分かったつもり」と表現した講演があった。今回のフォーラムに参加した人達は大学教育コミュニティの内部にいる人達であ

る。フォーラムが終了した現時点では、フォーラムに参加しなかった人達へ「主体的な学び」を説明しなければならない。どのように説明すれば、多くの人から理解が得られるかが大きな課題である。しかし、説明する相手は大学教育コミュニティの内部にいる人達である。「分かったつもり」で「主体的な学び」を理解してもらえると確信している。

FD 合宿研修会のお知らせ

恒例となりましたFD合宿研修会を平成25年8月28日(水)、29日(木)に開催する予定です。今年度の重点テーマ「教員が教える教育から学生が学ぶ教育へ」「教育の質保証に向けて—授業設計と成績評価—」について時間を掛けて議論し、お互いの情報を共有する場を提供します。多くの方の参加をお願い致します。詳細はポスターをご覧ください。



FD 推進部

本誌への原稿を募集しております。また、ご意見・ご感想をお寄せください。

YNU FDニュースレター No. 24

編集／横浜国立大学 大学教育総合センターFD推進部

作成担当：ニュースレター・ワーキンググループ

事務担当：教務課大学教育係

問合せ先：kyomu.kyoiku@ynu.ac.jp

発行／平成25年 6月